

[書評論文]

Masako K. Hiraga, *Metaphor and Iconicity:
A Cognitive Approach to Analysing Texts*

Houndmills, UK, and New York: Palgrave Macmillan. 2005. pp. xvi + 261.
ISBN 1-4039-3345-6

小 山 亘

1. はじめに

本書は、そのタイトルが示すように、メタファーと類像性(アイコニシティー)との相関を正面から扱ったものであり、テキスト、とくに詩的テキストの「構造」、すなわち構成原理、形成過程を、認知的視点から具体的に分析したものである。明らかに、メタファー、類像性、テキストの構造分析、認知過程、これらの問題系を統合的に扱うモデルを具体的に示そうと試みた点に、本書の根本的な独自性と語用論研究への貢献が見られよう。そして、このような統合を成し遂げるために——すなわち、認知言語学によって集中的に研究されてきたメタファーと、記号論において鍵概念となってきた類像性、これら両者を結び付けると同時に、文学研究においてさかんに行われてきた詩的テキストの構造分析と、他方、「作者」「読者」などの認知主体を巻き込んで進行するコンテクスト的過程を通して遂行されるテキスト生成、これら両者をも接合し、一個の統合的なモデルを提示するために——本書は、認知言語学、記号論、文学理論、構造主義のテキスト理論、「ポスト構造主義」のコンテクスト理論などを、横断的に、そして体系的に活用し、その共通の基盤を指し示そうとする。ここに、語用論研究、延いては言語、コミュニケーション研究全体に関わる、本書の重要な含意が存在するのだろう。つまり、諸々のアプローチ、分野間の相違を超えて、そして特に、「構造主義」対「ポスト構造主義」(後者は、語用論、認知言語学、解釈学、現象学などを含む)、あるいは「テキスト分析」対「コンテクスト分析」などといった偽りの対立、似非学説史的ステレオタイプを超えて、両者を統合し、言語、語用、コミュニケーションの全体に迫ろうとする契機が、本書の中に明瞭に見出されることに、この著作の本義があると思われる。このような方向にこそ、今後の言語研究、語用論、コミュニケーション研究が進むべき分野が広がっているであろう。

以下、本稿では、まず第一節で、本書の梗概を示したうえで、続く第二節で、本書が接合を試みた認知言語学と記号論の歴史的な系譜を概観し、両者の歴史的、そして理論的連続性、

親和性を明らかにしたい。つまり、いわば、第一節で本書の「テキスト」としての性格を素描し、第二節で、その歴史的「コンテキスト」を探り出す。

2. 要約

では、本書の論点の要約を示し、続いて、本書の構成を、著者自身の記述に沿って述べてゆく。まず、全体の梗概であるが、本書の最終章である第八章の第一節で明瞭に述べられているように、本書の要旨は、以下の三点に収斂する。第一に、韻文と散文、両者にわたり、メタファーと類像性は、言語の形と意味との関係を構成する主要な契機を成しているということ、第二に、メタファーと類像性は、相互に深く結び付いた現象であり、言語理論においても統合的に扱われるべきものであるということ、そして第三に、とくに類像性に焦点を当てることにより、これまで不当に扱われてきた書記言語という重要な主題が、言語研究において正当な位置づけを得て探求されうようになるということ、以上の三点が、本書が唱え例証しようとする理論的な主張の概要である (p. 219)。以下、これらの主張について、個々に説明したい。

まず、第一点、すなわち、韻文と散文、両者にわたり、メタファーと類像性は、言語の形と意味との関係（相互関連性）を構成する主要な契機を成しているという主張であるが、これは、もちろん、いわゆる「言語の任意性」テーゼ、つまり、言語の体系、言語の形と意味との対応に見られる規則性などのパターンは、言語外的（コンテキスト的）要因とは関係のない無契の（無縁の、任意の）ものであるという——換言すれば、言語コードの構造的な特徴は、（心理を含む）コンテキスト的な事象との類像（類似）関係ないし指標（連続）関係によっては動機付けられていない象徴的なものであるという——しばしば、ソシュールに帰せられる、現代言語学の（とくにチョムスキーに代表される形式主義の文法理論の）根本テーゼと見なされている教条に対峙して為された主張である。周知のように、「言語の任意性」テーゼは、「言語学」という専門分野の自律性を担保する教条として、この分野の言説の中で機能してきた。このテーゼを批判して、パース記号論の類像性と指標性という概念を大胆に援用して文法や文学の研究を行ったヤコブソンを嚆矢とする記号論的な言語研究、他方、チョムスキーの「言語（学）の自律性」、とくに「形式言語（学）の自律性」というテーゼを批判したレイコフやラネカーなどのかつての生成意味論者たちに端を発し、認知主体を含むコンテキスト的要因によって動機付けされた現象として談話のみならず文法をも位置づけてきた認知言語学、これら両者、記号論と認知言語学は、明らかに共通性を持つのであるが、その共通性の所在は、記号論の語彙で表すならば、象徴性に対して類像性と指標性（コンテキスト依存性）の重要性を言うことであり、これを認知科学の語彙で表せば、メタファーと場（身体、状況）の重要性を言うこと、となろう。言い換えれば、記号論と認知科学との間には強い親和性があり、両者は、表層的な語彙は違っても、ほぼ同じ志向性を持つ根本概念に依

扱って、言語と世界との関係を構想している。したがって、両者の鍵概念の間には強い相関が見られ、記号論の言う「類像性」と認知科学の言う「メタファー」、そして記号論の言う「指標性、オリゴ（指標野の基点）」と認知科学の言う「身体、場」、この二対は、それぞれ不分離な結合を示す。それにも拘らず、本稿の第二節で示すような歴史的、社会的な事情により、「類像性」と「メタファー」、そして「指標性、オリゴ」と「身体、場」は、「記号論」と「認知言語学」という異なった流派に属する研究者たちによって個々別々に研究されてきた。そのため、類像性や指標性に関して蓄積されてきた記号論の知見が、認知科学によるメタファーや身体、場の研究に殆ど、いかされておらず、逆に、メタファーや身体、場に関する認知科学の見識、研究成果もまた、記号論による類像性や指標性の研究に殆ど活用されていないという不幸な事態が生じている。本書の功績の一つは、記号論による類像性の研究と認知言語学によるメタファーの研究とを明示的に関連付けることにより、記号論と認知言語学の知見を統合したことであり、そしてそうすることによって、記号論と認知言語学の親和性を具体的に例示してみせたことである。この方向で、更に、記号論、とくに記号論系の言語人類学による「指標性」、「オリゴ」概念を軸にした相互行為の研究 (cf. Duranti and Goodwin 1992; Silverstein 1992) と、認知科学による身体、場の研究とが密接に結合しうることが示されれば、一個の強力な言語理論、コミュニケーション理論、おそらく 21 世紀の言語コミュニケーション研究のパラダイムを形作るような理論が生まれる可能性が現実に存在する (cf. 小山 2005)。

本書では、以上に記したような方向性に則って、第二の論点、すなわち、メタファーと類像性は、相互に深く結び付いた現象であり、言語理論において、統合的に扱われるべきものであるという主張が為され、その相互関連の詳細が、主にフォコニエとターナーのブレンディング理論 (Fauconnier and Turner 2002) に依拠しつつ、それを敷衍する形でモデル化され、具体的な詩作の緻密な分析を通して明示的に示されている。こうして、メタファーと類像性は、緊密に絡みあっており、事実、相互に相互の契機と成っているというテーゼが例証される。このテーゼの意味するところは、メタファーの創造や理解において、類像的なマッピング——類像性（類似性）の原理に基づいたイメージ・スキーマのマッピング——が構成要素となっている一方で、文法的メタファーによって言語の形態の類像化（類像的理解）が促され、また、テキストのメタファー的（隠喩的）な解釈がテキストの類像的な構造を露呈させるということ——別言すれば、メタファーの基底には類像性の原理が作用している一方で、類像的な理解・解釈の基盤にメタファーが関与している——ということである。

そしてこのような、類像とメタファーの相互的な嵌入は、単に音と意味との間でのみでなく、書記と意味の間にも明瞭に見られるという論点が展開されている。すなわち、メタファー、そして特に類像に理論的な焦点を当てることにより、今日まで言語研究の外部に置き去られてきた書記の問題に、理論的な介入ができるようになる、というのが、本書の第三の論

点であり、これは、次のような文化論的考察にも結び付けられる。一般的に言って、表音文字に加えて漢字を含む文字レパートリーを持つ日本の詩は、音の領域に加えて書記の領域との間の類像性も重要な要素と成っているのに対して、西洋の詩は、コンクリート・ポエトリーなどを例外として、意味の領域と音の領域との間の類像性をその特徴とすることが示唆するように、「西洋的」な文芸、言語思想（詩学、近代言語学などを含む）は、書記言語を口頭言語に対して副次的とみなす音声中心主義の傾向が強い（Derrida 1967, 1976）。このような西洋中心主義、音声中心主義の言語観を批判して、著者は、たとえばロイ・ハリスなどに倣い、書記というものを、音声言語と明瞭な対応関係を示すものだけでなく、示さないものも含めた、書記空間でのコミュニケーションの全体として、構想する必要があることを説き、そのような構想において、メタファーと類像性が要石の位置を占めるであろうことを指摘する。また、電子媒体でのコミュニケーション、つまり、エモティコン、フォント切り替え、モニター上のアイコンなど、コンピュータに関わる書記の様態は、書記言語のなかでの類像性の重要性のみならず、とくに現代のコミュニケーションにおける類像性の重要性も強く示唆し、この領域の理論化の必要性を指し示すものであるという主張も為されている。（ちなみに、類像と書記（文字）は、本書と同じく、認知科学と記号論とを接合しようと試みている菅野（1999）でも、主題となっていることを銘記されたい。メタファーを扱っている菅野（1985）も参照のこと。）

以上、本書の要旨をなす三点について梗概的に述べた。次に、その理論的、方法論的な特徴に絞って論述を進めたい。本書は、Herbert の *Easter Wings*、Shelley の *Love's Philosophy*、芭蕉の『奥の細道』、William Carlos Williams の *The Red Wheelbarrow*、紀友則の和歌など、日本語と英語の韻文テキストを主な分析対象とし、そこでのメタファーと類像の働きを詳細に追うことにより、実際の（詩的）テキストの生成、理解のあり方を十全に掴むためには、テキストの構造分析のみ、あるいは、認知論的なメタファー理解のみ、では十分ではなく、両者を体系的に統合するアプローチが必要であることを実証しようと試みる。こうして、パース・ヤコブソンの記号論によるテキストの構造分析と、他方、フォコニエ・ターナーの（「メンタル・スペース」の延長線上に位置する）メタファーのブレンディング理論、これら両者が体系的に接合されて、相互に補完されることにより、類像性とメタファーとの複雑な絡み合いのメカニズムをモデル化する理論が立てられて、その理論に基づいて、統合的な（記号論的かつ認知科学的な）詩の分析、類像性とメタファーとの相互作用の分析が行われるのである。

したがって、まずメタファー理論に関して言うと、本書は、認知的アプローチ、とくにフォコニエ・ターナーのブレンディング（融合）理論の枠組みを採用しつつ、それを、より詳細な部分にまで展開し、同時に、記号論の領域、詩的テキスト分析にまで拡張する、という構成になっている。より標準的なレイコフ・ジョンソンのメタファー・モデルではなく

(Lakoff and Johnson 1980; Lakoff 1987)、フォコニエ・ターナーの枠組みが援用されている理由は、後者の方が、創造性、意味の創発性の問題を正面から取り扱えるアプローチであること、つまり、言語やコミュニケーションや意味というものを、創造的な過程として捉える傾向が強いものであるということ、そして、そのような創発的な過程において重要な役割を果たす諸々のコンテクスト的要因（感情、推論、前提的知識など）を取り込める語用論的なモデルであること、また、テキストを構成する、メタファー以外の言語現象（並置などの構造的特徴や、多義性をもたらす語彙の装置など）も包含した射程をもつ理論であること、などが挙げられている (p. 222)。

つぎに類像性とテキスト分析に関しては、本書は、テキストの形式的特徴が示すパターンを類像性（類似した要素の反復）という非常に一般的な原理に基づいて詳細な分析を行うことをその特色とするヤコブソンのモデルに対してなされてきた「テキスト主義」、「コンテクスト軽視」という批判を、テキスト制作者やテキスト解釈者の認知過程というコンテクスト的要因を記号論的テキスト分析に統合し、後者を前者の枠組みで捉えなおすことによって、克服するという方略を取っている。そして同時に、これは、記号論による詳細なテキスト分析を、認知的な詩の分析にもたらすことにより、後者のテキスト分析の水準を更に高めるといふ結果に繋がる。

以上、本書の要旨、および方法論的な特徴について述べた。つぎに本書の構成についても簡単に触れておく。本書は三部から成っており、第一章と第二章とから成る第一部 (Framework) では、全体の要旨、研究の理論的背景、分析の射程、意義などの提示、そして、パース記号論の基礎と「類像性」概念の解説 (cf. Lee 1997; Parmentier 1987)、ヤコブソンの「詩的機能」の再考察 (cf. Jakobson 1960; 坂部 1989 [1981])、フォコニエ・ターナーのブレンディング理論の明解な説明、メタファーのブレンディング理論と類像性とを統合した本書のモデルの提示などが為されている。つづく第二部 (Analysis) は三章 (第三～五章) から構成されていて、第一部で提示されたモデルに基づき、日本語と英語の韻文テキスト (上述) の多面にわたる詳細な分析が遂行されている。第三章で、*Easter Wings*、*Love's Philosophy*、『奥の細道』など、四つのテキストが、どのように、類像性とメタファーの相互作用により構成されているかが詳説されたのち、つづく第四章で、英文の視覚的な詩や、芭蕉による『奥の細道』の表記 (かな、漢字) の推敲に関するデータに基づき、メタファー、そしてとくに類像性に依拠して作用する視覚と意味の働きが解き明かされている。第五章では、音義現象 (phonosymbolism) や、類像性による音の構造化を分析し、ここでは、聴覚と意味の局面に焦点を当ててメタファー、類像性の働きが詳説される。そして以上を受けて、三章 (第六～八章) から成る第三部 (Further Issues) では、これまでの議論の要約と、その一般言語学的な含意が明記される。第六章では、文法と談話にみられるメタファーと類像性の相互作用について考察が行われ、文法メタファーの諸類型と、丁寧表現におけるメタフ

ァーと類像の働きが論述されている。つづく第七章では、漢字に焦点を当てて書記言語の問題が根本的に問い直され（上記参照）、類像性と書記コミュニケーションの関係が探求され、そのような考察に基づき、また、マクルーハンなどのメディア論的な洞察にも依拠しながら、電子時代におけるコミュニケーションのあり様が再考されている。最後に第八章では、本書全体の要約が簡明に述べられて、言語観やコミュニケーション観の刷新の方向が示唆されている。

以上、本書の内容を簡単に紹介した。つぎに、記述の射程を「テキスト」から、それを取り巻く社会歴史的「コンテクスト」へと拡張し、本書の持つ「意味」をマクロ歴史的な長期的過程のなかに基礎付けたい。すなわち、上で示したようなかたちで本書が接合を試みた認知言語学と記号論の歴史的な系譜を概説し、両者の歴史的、および理論的連続性、親和性を明らかにすることにより、本書の持つ歴史的意義を明確にする。

3. 認知言語学と記号論の系譜

本書が疑念の余地なく示してみせたように、記号論の鍵概念である類像性と、認知科学の中心主題であるメタファー、あるいはより一般には、記号論と認知科学、両者は強い親和性、結束性を示す（cf. 菅野 1999）。しかしながら、記号論と認知科学の相互関連性は現在まで、あまり広く明瞭に認識されてはこなかったと言わざるをえない。なぜそのような事態が生じたのか、その原因は、本書のような企てが明らかにしているように、理論自体、あるいは理論の基底にある言語観などではなく、理論の外部、あるいは理論を取り巻く社会環境に求められねばならない。以下、言語や心理の理論を包含する社会史へと視野を広げることにより、この問題を探求し、本書のもつ歴史的意味を可視化したい。

まず最初に着目すべきことは、いわゆる「構造主義」や生成文法などの形式主義の言語学と、他方、記号論、認知言語学、機能主義の言語学など、これら両者の対立の根底には、言語や言語学の自律性を巡る問題があり（Mey 2001）、そしてこれは、専門的な学問領域とその研究対象の定立、確立という問題と、当然ながら深く関与しているということである。明らかに、これは少なくとも部分的には社会的な問題であり、実際、社会史的な現象である。すなわち、多くの社会学者や哲学者たちが指摘してきたように（cf. Koyama 1999, 2000, 2005）、西洋近代、特に19世紀西欧という社会歴史的なコンテクストにおいて、学問の専門化が急激に進行し、今日、我々が知っているような諸学、たとえば「言語学」などが生成したという事実が、まず確認されねばならない。もちろん、そのような変化が起こった要因として、学問内部の展開も一定の役割を果たしたにはちがいないだろうが、この時代が、学問のみならず社会全体が専門化の動きを示した時期であることから分かるように、そしてまた、学問というものが、常に或る社会的集団によって或る社会的状況下で遂行されるものであるという自明の事実が示唆するように、強度に専門化した学問領域というものは、19世紀以降の社

会変遷の歴史的構築物、社会史的現象であると、特徴づけることができる (Kuklick 1991, pp. 27, 36-37, *et passim*)。もしもそうであるならば、学問、科学の規範としての自律性、専門性という考えは、超歴史的な、先験的なものではなく、歴史的、社会史的に相対化されるべき性質のものであり、そして事実、とくに心理学、社会学、人類学、そして言語学など、19世紀の専門化の過程の結果、19世紀末から20世紀の初頭にかけて成立した人間科学の領域において、自律的、専門的な学問のあり方に対する異議申し立て、すなわち、自律性、専門性という規範を相対化する認識論的(科学論的)主張および実践は、たとえば包括性(横断性)、全体性、現実性(妥当性)、具体性(経験)などの名の下に、これらの学問の成立以来、常に為されてきた。ヤコブソンによるソシユール批判や言語学的な文芸研究、生成意味論者たちや機能文法家によるチョムスキー批判や言語学的な認知研究、ポアス、サピア以来の言語人類学者による、言語と社会、文化の相関科学的研究、ラボヴなどの社会言語学者によるチョムスキー批判や言語と社会との相関の研究などが示すように、言語学もまた、その例外ではない。

したがって、19世紀末から今日に至る言語学の有り様は、19世紀に起こった専門化(と、それに対する異議申し立て)という社会史的な現象によって強く規定されてきたものであると言える。つまり、それ以前は、思想家や文献学者などによって、文化、文芸、歴史、人間などと共に研究されていた「ことば」が、この時期、19世紀に、他から切り離されて、「言語学」という一つの専門的な学問によって研究されるようになったこと、言い換えれば、ことばを、それを取り巻く環境、コンテクスト(社会、文化、文芸、歴史、人間、心など)から切り離すことにより、近現代の言語学は成立したということ、したがって、そのような学問においては、そして特に、1970年代まで言語学の主流派であった形式主義者と呼ばれる文法学者たちによっては、ことばは、文化やコミュニケーションや文芸や人間とは周辺的にしか関係性を持たないものと見なされがちであったこと、そしてそれにもかかわらず、そのような狭隘な言語学、自律主義的で形式主義的な言語研究の限界、その科学論的(認識論的)ないし社会文化史的な相対性(限定性)を指摘する研究者たちが存在しつづけてきたということ、すなわち、ことばを、文法などの形式的な規則性以上のものであると見なして、文化、宇宙観(自然観)、認識、心理、行為、文芸などとの関係において考え続けた言語学者たちが存在したということ、これらの一群の歴史的な事実を確認することができる。

そしてこれらの事実は、以下の四つの命題を示唆していると思われる。第一に、少なくとも19世紀以降の専門化した社会において、言語への形式的なアプローチは何らかの正当性を持つものであると広く認識されてきたということ、しかし第二に、それが限界を持つものであることも、また広く認識されてきたということ、そして第三に、専門化の時代において、形式的な、自律的なアプローチが主流を占めるようになった結果、それに対して批判的な、言葉への総合人間学的なアプローチは、えてして周辺的な位置に置かれ、統合されない分散

的な様態を示してきたということ、したがって第四に、専門化の時代以降の近代的な言語研究の「パラダイム」を収束させるためには、おそらく、形式的なアプローチと総合的なアプローチを徒に対峙させ続けるのではなく、あるいは総合的なアプローチの百花繚乱的な状態を無邪気に言祝ぐのでもなく、形式主義的なアプローチに対抗しうるような統合性を持ち、しかも言語の形式的側面も適切に包含しうるような、総合的なアプローチに基づく理論を構築する必要があること、つまり、たとえば、認知言語学や記号論などの総合的なアプローチを統合し、そして談話や文法の形式的な、「構造的」な側面に対しても十分な適切性を持つような理論を構築する必要があること、以上のような命題が、歴史的な総括として示唆される。そしてこのような認識論的、社会史的な枠組みに照らして、現在の諸々の言語研究の、社会文化的な、科学的な「価値」が測られるべきだろう。認知言語学と記号論とを統合し、テキスト分析とコンテクスト的認知過程の考察を統合せんとする本書の意義は、このような認識論的、社会史的な枠組みの中で、特徴づけられるべきものであると言える。

以上を確認したうえで、そのような19世紀以降の専門化の時代において、本書を一つの結節点とすることになる記号論の伝統と、認知科学の系譜、これら両者はどのように生成してきたか、歴史軸に沿って、以下、簡単に見てゆきたい。まず近代においてはジョン・ロック(1632-1704)などに端を発する記号論の系譜だが、これはヤコブソン(1896-1982)によって言語学へと導入される以前、すでに哲学者のパーズ(1839-1914)による体系化を経ている。記号論を中核とし「プラグマティシズム」とも呼ばれるパーズの哲学は、トランセンデンタリズムなどの形而上学が、19世紀に抬頭したダーウィン進化論によって動揺し、フレーゲ(1848-1925)以降の述語論理学、分析哲学を中心とした20世紀の英米哲学の伝統へと取ってかわられていく転換期に位置しており(Kuklick 1977)、形而上学的、進化論的、つまり総合的宇宙論と、他方、形式的な事柄への志向性(あるいは分析への意志)、これら両者を内包したものであったことに注意されたい(伊藤 2006)。パーズの記号論が、宇宙論的な全体への志向性のみならず、形式的な分析への意志によっても裏打ちされていたことは、例えば、パーズが独自の、つまり、フレーゲのそれとは異なった、述語論理学の記号体系を創出したことから明らかであろう(cf. Lee 1997)。しかしパーズの論理言語は、数学者であったフレーゲのそれのように数式に倣った象徴記号の言語ではなく、類像記号、指標記号も含めた人間の認識・判断の論理言語であり、そして自然言語もまた、この包括的な記号の体系のなかで、象徴性のみでなく、類像性、指標性を持つものとして位置づけられている。つまり、記号論と呼ばれるパーズの壮大な哲学体系では、言葉、「自然言語」は、人間による世界の認識という問題領域の中に定位され、そして人間の世界認識は、人間の行為(pragmatics)や宇宙・生命の目的(evolutionary love)という枠組みの中へと基礎付けられていた。当然、パーズの記号論は、その余りにも大きく宇宙論的な、「形而上学」的な体系性のためもあり、専門化を特徴とする近現代科学の周辺に留まり続けることになる。だがパーズの記号論は、ロ

シア未来派の前衛詩人、フォルマリストの文学者、そして同時に言語学者でもあったロマン・ヤコブソン (1896-1982) によって発見され、そしてヤコブソンは、1950年代のハーヴァードで、パースの記号論を基礎に、ソシュール (1857-1913) 以降の現代構造主義言語学を、形式主義の文法理論の軛から解き放ち、形式主義的な文法分析を、詩学、文芸、美学、行為論、出来事論に再び結びつけることに成功する。(ヤコブソン記号論における、文法論と行為・出来事論との統合については、いわゆる means-end モデル (機能主義的コードの理論) や、Jakobson (1957) に見られる転換詞の分析などを参照。) 換言すれば、形式性と総合性 (全体性)、これら両者の特徴を併せ持つパース記号論に依拠することにより、ヤコブソンは、言葉を形式的かつ全体的な、そしてテクスト的かつコンテクスト的な、現象として捉えることに成功したと言えるだろう。

しかし壮大なパースの体系に依拠し、文法、詩、言語行為などを横断的に取り扱うヤコブソンの記号論は、言語学者としてのヤコブソンの、アメリカにおける多大な影響力 (マナ) にもかかわらず、彼の多くの弟子たちによってさえ、言語学の外部にあるものと位置づけられた。例えば、ヤコブソンの弟子であったモリス・ハレ (1923-) は、チョムスキー (1928-) と共に 1960年代のアメリカ言語学を席捲する生成文法学派を率いたのであるが、彼らの理論は、基本的に、新ブルームフィールド学派の俊英で、チョムスキーの師であったハリス (1909-92) の統語論と、カルナップ (1891-1970) の論理的統語論との複合物であり (Koyama 2005a)、したがって、新ブルームフィールド学派以来のアメリカ形式主義言語学の枠組みを出るものではない。確かにチョムスキーらは、ことばと心との関係について語ってはいたのだが、そこでは、ことばは、形式的文法に、そして心は形式合理的思考に収束し、詩、行為、出来事、世界認識、文化、宇宙観 (自然観) など、数多の記号論的事象は、彼らの言語学・心理言語学から排除されていた。

言うまでもなく、チョムスキーらに代表されるアプローチ、すなわち形式主義というものは、幾つかの「徳」を有するのだが、その一つは、当然、対象とする事象の形式性、形式的特徴を正面から扱いうるということであり、もう一つは、形式的アプローチの限界を、形式性の外部を、つまりは「実質」(行為、出来事) とそれを含む全体を、陰画的に、しかし明らかに、指し示すということである。したがって、形式主義の理念を徹底的に追求したチョムスキーの後に続いた者たちのうち、「生成意味論者」と呼ばれた研究者たちは、形式的な分析の限界、すなわち、音素の分析が文法範疇の分析を前提としなければならないのとまさしく同じように (Pike 1947)、統語分析も意味の分析を前提とし、そして後者も語用の分析を前提とせねばならないことを見出したのである (Koyama 1999, 2000)。さらに、語用の領域とは、文化、社会、心理などに跨る実践と過程の領野であるのだから、これはすなわち、文化、社会、心理を排除しては、文法や論理の形式的な側面さえ適切に扱えないことを意味している (Mey 2001)。より一般化すれば、やがて認知言語学者となる文法論者たちが正確に理解

したように、形式的な文法や論理は、ことばの全てではなく、そして形式合理的な思考は心の全てではない。そのような生成意味論者の一人がジョージ・レイコフ (1941-) であり、彼は、1970年代中葉に、言語学をゲシュタルト心理学に接合して「ゲシュタルト言語学」を旗揚げした (Lakoff 1977)。これがやがて、とくにバークレーの地で、ロッシュのプロトタイプ意味論 (Rosch and Lloyd 1978)、ザデーのファジー論理学 (集合論)、あるいはケイ等のエスノサイエンス (民族認知科学) の一部など (Blount 1995) と結合し、ことばをメタファーや範疇化などの概念的な心理過程や、人間存在の身体的経験に結びつける認知言語学へと展開する。レイコフだけでなくラネカー (1942-) などのかつての生成意味論者や、そのほか、上述のロッシュなどの心理学者やポスト分析系の哲学者なども加わって形成された認知科学では、ことばが、文法との関係だけでなく、身体的経験や多様な心理過程との関係で捉えられ、その枠組みの中で、文学、政治的言説、日常的言語使用、そして文法において、修辭的過程など、身体や状況 (コンテクスト) に投錨された心理過程がどのように作用するかが分析されるのである。

このようにして認知言語学は、チョムスキーの形式主義言語学の内部から現れて、ゲシュタルト心理学、プロトタイプ意味論、ファジー・ロジックなどと結びついて理論形成を行い、言葉と心を、文法と形式合理的思考の牢獄から解き放つことに貢献した。したがって認知言語学は、ハレやチョムスキーなどによって抑圧されたヤコブソンの記号論とは、直接的には連続していない。しかし、上述からも明らかなように、言葉を文法や合理的思考以上のものであると見なす点において、そして言葉を、文化、宇宙観、認識、心理、行為、文芸などとの関係において捉えている点において、認知言語学と記号論は明らかに通底している。

そして実際、史的系譜においても、両者の関連性は確認できる。上に見たように、レイコフが認知言語学へと至る道の途上には、ゲシュタルト心理学があった。この、人間の認識心理における全体的構造や状況依存性の重要性を説く、20世紀前期に中央ヨーロッパで起こった心理学の学派は、同時期に同じ場所で生じた思想——例えば、西南ドイツの新カント主義の哲学、フッサール (1859-1938) の現象学、心理哲学者カール・ビューラー (1879-1963) による指標野 (index field; *Zeigfeld*) の言語理論、プラハ学派の構造主義言語学と文学理論 (Galan 1985) ——これらと強い親和性を持ち、両者の間には人的交流も存在した。そしてヤコブソンは、ロシアでヘーゲルの全体性と弁証法の哲学を学んだ後にプラハに渡り、ウィーンへと移住した同志トウルベツコイ (1890-1938) と共に構造主義プラハ学派に参加し、フッサール現象学へと接近したのである (Jakobson 1973, 1985, 1987, 1990)。その後、ナチスを逃れてアメリカに移り住んだヤコブソンは、ハーヴァードに辿りつき、そこでパースの記号論を発見する。(特にヤコブソンが目指したのは、パースによる、類像 (icon)、指標 (index)、象徴 (symbol) という記号の三分類であり、これらは順に、類似的関係性、隣接的關係性、社会 (集団) 表象・規約的關係性に基づいて作用する記号様態を意味する。) そして全体性と

弁証法の哲学、心理学、言語学、文学、美学、文化論を統合できる、このパースの記号論の枠組みに基づいて、ヤコブソンは言葉を、文法・論理、詩学、文芸、美学、行為論、出来事論に跨るものとして捉える理論を築いていった。例えば、(a) 指標と (b) 類像というパース記号論の概念 (上記参照) を使って、(1) 文法、(2) 修辞、(3) 文学ジャンル、(4) 行為・出来事を横断的に分析して、(1 x a) 指示詞などの直示表現 (ダイクシス)、連辞 (シンタグム)、言説 (ディスコース) と (1 x b) 擬音語擬態語・音義現象・引用、パラダイム (範列)、タイプ・トークン関係、(2 x a) メトニミー (換喩) と (2 x b) メタファー (隠喩)、(3 x a) リアリズム小説と (3 x b) ロマン主義のポエジー、(4 x a) 場 (コンテクスト) と (4 x b) 反復、テキスト生成など、様々な現象の相関を体系的に炙り出すことに成功したのである (Jakobson 1987, 1990)。

しかしヤコブソンが元来、ロシア未来派の前衛詩人であったこともあり (Jakobson 1997)、彼の記号論は特に言語と詩学・文学との関係に集中して展開され、言語と文化・社会の関係や、言語と認識・心理の関係の記号論的探求は、後進に託されることになる。不幸なことに、上述したようにヤコブソンの記号論は、彼の多くの「言語学者」の弟子達によっては理解されず、1960年代に一世を風靡したチョムスキーの生成文法の影に隠れてしまう。やがて生成文法の狭隘な枠組みが、生成意味論者たちによって突破され、認知言語学が登場し、言葉が再び文学や認識・心理との関係で語られだしたとき、認知言語学者たちの多くは、先行するヤコブソンたちの営為を、記号論を、忘却した世代に属していた。

だが、パースとヤコブソンが打ち立てた記号論の系譜が全く途絶えてしまったわけではない。ヤコブソンの多くの弟子たちの内の幾人かは、記号論のプログラムの意義を正しく理解し、この伝統を継続し、発展させてきた。例えば、人類学、とくに記号人類学や言語人類学では、デル・ハイムズ、ミルトン・シンガー、ポール・フリードリック、マイケル・シルヴァスティン、ビル・ハンクス、ジョン・ルーシー、リチャード・パーメンティアなどにより、記号論は、ことばと社会、文化、歴史、認識・心理を記述・分析する基礎理論として展開されている。特に「指標性」(上記参照) は、今日の言語人類学にとって不可欠の鍵概念となっている (cf. Blount 1995; Duranti and Goodwin 1992; Hanks 1990; Lucy 1992, 1993)。また、ヤコブソン晩年の弟子であったリンダ・ウォーや、あるいはジョン・ハイマンやギヴオンなどにより、ことばの「類像性」は体系的に扱われてきた (Givón 1989; Haiman 1985a, b; Jakobson and Waugh 1979)。だが今日まで、言葉、類像、メタファー、詩と認識・心理の関係は、体系的に分析されては来なかったと言わざるをえない。

そのタイトル、*Metaphor and Iconicity: A Cognitive Approach to Analysing Texts* が示すように、平賀によって2005年に上梓された本書は、メタファー、類像、認識・心理、詩的テキスト分析を横断的に、しかし統合的に、扱ったものである。そして本書は、上に本稿第一節で示したように、ヤコブソンからウォーに引き継がれた類像性や韻文の記号論的分析を、

認識・心理の問題系に直結するという課題に正面から取り組み、それを十全に展開してみせた。言葉を文法や論理的思考に縛り付ける狭隘な思考を拒み、1980年代からヤコブソン記号論に基づいて精力的に詩の構造分析を行ってきた本書の著者は、ヤコブソン記号論を直接コーネル大学にいたウォーのもとで学んだだけでなく、1970年代以降、急速に発展してきた言語に関わる諸科学、特に語用論と認知言語学を自らの学問体系に取りこみ、ヤコブソン記号論に接合することに成功する。こうして、ヤコブソンからウォーへ、そして平賀へと引き継がれた類像性や詩の記号論的分析は、彼女の手によって、レイコフ、ジョンソン、ターナー、フォコニエなどの認知言語学、その認識・心理・メタファーの理論に接合され、言語と認識・心理、類像、メタファー、詩の関係は、ここに初めて体系的に分析されるに至ったのである。チョムスキー形式主義言語学によって不幸にも分断されてしまったヤコブソン記号論と認知言語学との連関は、この書によって、大きく回復されたと言ってよい。

参考文献

- Blount, B.G. (ed.) 1995. *Language, Culture, and Society* (second edition). Prospect Heights, Ill.: Waveland.
- Derrida, J. 1967. *La voix et le phénomène*. Paris: Presses Universitaires de France.
- Derrida, J. 1976 [1967]. *Of Grammatology*. Baltimore, Md.: John Hopkins University Press.
- Duranti, A. and C. Goodwin. (eds.) 1992. *Rethinking Context: Language as an Interactive Phenomenon*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fauconnier, G. and M. Turner. 2002. *The Way We Think: Conceptual Blending and the Mind's Hidden Complexities*. New York: Basic Books.
- Galan, F.W. 1985. *Historic Structures: The Prague School Project, 1928-1946*. Austin, Tex.: University of Texas Press.
- Givón, T. 1989. *Mind, Code, and Context*. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum.
- Haiman, J. 1985a. *Natural Syntax*. Amsterdam: John Benjamins.
- Haiman, J. (ed.) 1985b. *Iconicity in Syntax*. Amsterdam: John Benjamins.
- Hanks, W.F. 1990. *Referential Practice: Language and Lived Space among the Maya*. Chicago: University of Chicago Press.
- 伊藤邦武. 2006. 『パースの宇宙論』東京：岩波書店.
- Jakobson, R. 1957. *Shifters, Verbal Categories, and the Russian Verb*. Cambridge, Mass.: Harvard University Russian Language Project.
- Jakobson, R. 1960. "Linguistics and Poetics." In T.A. Sebeok ed. *Style in Language*, 350-77. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Jakobson, R. 1973. *Main Trends in the Science of Language*. London: George Allen & Unwin.
- Jakobson, R. 1985. *Verbal Art, Verbal Sign, Verbal Time*. Minneapolis, Minn.: University of Minnesota Press.
- Jakobson, R. 1987. *Language in Literature*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Jakobson, R. 1990. *On Language*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

- Jakobson, R. 1997. *My Futurist Years*. New York: Marsilio.
- Jakobson, R. and L.R. Waugh. 1979. *The Sound Shape of Language*. Bloomington: Indiana University Press.
- Koyama, W. 1999. "Critique of Linguistic Reason, I: Pragmatic Prerequisites to Universal Grammatical Analysis." *RASK* 11, 45-84.
- Koyama, W. 2000. "How to Be a Singular Scientist of Words, Worlds, and Other (Possibly) Wonderful Things: An Obituary for James D. McCawley." *Journal of Pragmatics* 32, 651-86.
- Koyama, W. 2005. "Anthropology and Pragmatics." In K. Brown (ed.) *Encyclopedia of Language and Linguistics* (second edition), Vol. 1. 304-12. Oxford: Elsevier.
- 小山亘. 2005. 「社会と指標の言語：構造論、方言論、イデオロギー論の統一場としての史的会話用論」、片桐恭弘・片岡邦好(編)『講座社会言語科学 第五巻：社会・行動システム』40-53、東京：ひつじ書房。
- Kuklick, B. 1977. *The Rise of American Philosophy: Cambridge, Massachusetts, 1860-1930*. New Haven, Conn.: Yale University Press.
- Kuklick, H. 1991. *The Savage Within: The Social History of British Anthropology, 1885-1945*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, G. 1977. "Linguistic Gestalts." In *Papers from the Thirteenth Regional Meeting, Chicago Linguistic Society*, 236-87. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lee, B. 1997. *Talking Heads: Language, Metalanguage, and the Semiotics of Subjectivity*. Durham, N.C.: Duke University Press.
- Lucy, J.A. 1992. *Language Diversity and Thought*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lucy, J.A. (ed.) 1993. *Reflexive Language: Reported Speech and Metapragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mey, J.L. 2001. *Pragmatics: An Introduction* (second edition). Oxford: Blackwell. [小山亘 訳 2005. 『批判的会話用論入門：社会と文化の言語』東京：三元社。]
- Parmentier, R.J. 1987. "Peirce Divested for Non-Intimates." *Recherches sémiotiques / Semiotic Inquiry* 7(1), 19-37.
- Pike, K.L. 1947. "Grammatical Prerequisites to Phonemic Analysis." *Word* 3:3, 155-72.
- Rosch, E. and B. Lloyd. (eds.) 1978. *Cognition and Categorization*. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum.
- 坂部恵. 1989 [1981]. 「隠喩と『主体の問題』」、『鏡のなかの日本語』135-51、東京：筑摩書房。
- Silverstein, M. 1992. "The Indeterminacy of Contextualization: When is Enough Enough?" In P. Auer and A. di Luzio (eds.) *The Contextualization of Language*. 55-76. Amsterdam: John Benjamins.
- 菅野盾樹. 1985. 『メタファーの記号論』東京：勁草書房。
- 菅野盾樹. 1999. 『恣意性の神話：記号論を新たに構想する』東京：勁草書房。